

BOTAN
ポータン

タイからの手紙(下)

富田竹二郎訳

タイ叢書 文学編 4



井村文化事業社 発行
勁草書房 発売

訳者紹介

富田竹二郎 (とみた・たけじろう)

- 1939 大阪外国語学校英語部卒業
1941 同中国語部修了，同校大陸語学研究所所員
1942—1946 中泰比較言語学研究のためタイ国チュラーロンコーン大学に
留学
1946 大阪外事専門学校講師〔中国語〕
1949 大阪外国語大学助教授，タイ語学科主任となり現在に至る
1962 大阪外国語大学教授〔タイ語学・文学専攻〕
(1966—1968, 1972—1974 タムマサート大学教養学部，チュラーロンコー
ン大学文学部の「日本研究講座」主任教授として派遣さる)

日本音声学会，日本言語学会，日本語教育学会，東南アジア史学会，
Siam Society 会員

著書：「タイ語基礎」，「日タイ会話辞典」，「タイ語の話し方」，「タ
イ日・日タイ小辞典」，「タイ語標準教本」Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ等

タイからの手紙(下)

<タイ叢書文学編 4>

1979年9月20日 第1刷発行

著者 ボー タ ン

訳者 富田竹二郎 ©

発行所 株式会社 井村文化事業社

東京都渋谷区道玄坂 2-16-3

発売所 株式会社 勁草書房

東京都文京区後楽 2-23-15

振替 東京 5-175253

落丁・乱丁本はおとりかえします

製版 清水印刷
印刷 港北出版印刷
製本 谷島製本

“ボーター”
牡丹作

富田竹二郎 訳

チヨット・マリー・チャーク・ムアン・タイ
タイからの手紙(下)

第五十一信と第百信

※註

※ 註には通し番号を用いたが、その中で(へ)をつけた番号は原著者の註、そうでないものは訳者の註である。

(第五十一信)

バーンコック・ヤオワラー
曼谷耀華力路

ふすのとみ

癸巳五月一日 (1953・6・11)

わたしの非常に、愛する母上に、跪拝致します。

わたしの病気は治りました。わたしの病氣中に美鶯が、會計担当者や、商品配達車の監督など、わたしの代理を勤める人を見つけておいてくれていましたので、わたしの仕事は減りました。連中を余り信用してはいませんが、仕事はこのまま続けささねばなりません。何も誤を犯していないのに、だしぬけに追い出したりするのも、些か残酷な話です。しかしわたしはまだ、帳簿はいつも自分で調べています。うちの金銭に関することは、すみずみまで監督していなければなりません。もし放ったらかしにすれば、後で困ることになるかも知れません。工場と卸し商品の配達の方は、信用が置けます。お得意さんの方で、毎回多額の金を送ってくれますし、わたしに直接払ってくれることが多いんです。小切手で払ってくれることもあり、その時はわたしは銀行へ行って、現金化せねばなりません。雇人が金に手をふられる機会は、小売以外には大してありません。

ん。しかし乾物店の方では、余り信用ができません。品物によつては、金額が安いものですから、細かく帳面にはつけていないので、容易にわれわれの目や耳を、ごまかすことができます。僅かなことだからまあいいや、と思わなければなりません。実際は、塵も積れば山となる、ということもあります。

今の人間は便利さや快適さということに、余りにもまどわされることが多いです。わたしはそれで、喧嘩というほどではないのですが、美鶯とやり合いました。わたしが氣を廻しすぎたのかも知れません。便利さと見栄がよいということは、非常に人を惑わせる物です。

「うちも車を一台買わないといけないわ。」ある朝の食卓で、美鶯がわたしに言いました。永欽が直ちに賛成しました。

「うわあ、いいなあ。それでぼくを学校まで送ってくれるんだね。きれいな色の車で、学校まで送って来て貰っている友だちがたんといふよ。ぼくは車がないから、恥ずかしいったらないよ。うちの家は貧乏だ、と思われてるんだよ。昼ごはんも持って行って食べなきゃならないけど、他の人はみんな、買って食べてるんだよ。」

「うちのご飯の方が、買うて食べるより清潔だよ。」わたしは車を買うことには無関心でした。「誰がわしらを貧乏だと思おうと、思う奴には思わしておけばいいじゃない

か。わしらは人に物を貰って、食つとるんじゃない。自分の物を食い、自分の家がある。人がどう思おうと、怖がることなんかないじゃないか。」

「でも、わたしはほんとに哀れな暮し方をしてるわ。どこへ行くにもバスか電車。三輪車さんりんしやでさえ、いつも無駄に使う、と言うてなかなか乗らせてもらえない。」美鶯はまくし立てました。「車を買うぐらいのお金はあるじゃないの。あり余るほどだわ。配達配達の車は買えても、乗用車は買えないのね。」

「車は高いよ。配達配達の車は商売をする必需品だから、やりや話は別だよ。それにわしらは、余り方々へ出かけたし、せんじやないか。工場にいるか、さもなけりや家におる。買うても使わんけりや、何のために買うんだい？ ぼくは車の運転がでけんし、きみも店にいて商いをせにやならん。」

「使うわよ。車があれば、晩に潮劇うしなを見に行くわ。運転手を一人雇つて。どこへ行くにも、ああもう日が暮れる、暗くなる、なんて心配せんでもいいわ。朝早くには、子供を学校へ送って行くし。あんた車の運転を習うべきだわ。」

「話にならん。車は高いし、それにまた運転手の給料、油代に修繕費がかかる。きみの妹は自分で運転してて、車のことで幾ら使ったんだい？」

美鶯はその朝は、もうそれ以上つべこべと言いませんで

したが、永欽は毎日車のことを言い出すので、わたしはうるさくなり、叱りつけました。

「電車に乗りりや、それでいい。一歩外へ出りや、余りらくじやない、ということも、ちつとは知れ。ちつとは苦しいことも、知らにやいかん。あんまり楽をすると癖になる。男に生まれて来ておきながら、そんなに楽ばかりしたがっていいのか！」

瑞錦みぎきが兄の助太刀をして言いました。あの子は叔母さんの車に、たびたび乗せてもらうので、病みつきになってるんです。紅梅べんばいは子供に悪い癖をつけてしまいました。

「わたしは楽がしたいのよ。叔母さんの車はクッションがすごく軟いわ。電車みたいなことないわよ。よその人と押し合いへし合いせんでもよいし。お金もあるのに、お母さんは、うちの家にはお金がたくさんある、叔母さんの所より、まだたくさんある、と言うてたよ。叔母さんのところが買えるのに、なんでうちは買わないの？」

「車が欲しかったら、子供が遊ぶ車を、父さんが一人一台ずつ買うてあげる。」

「いやだ。乗ることができると、本当の車が欲しいよ。車に乗って学校へ行くんだよ。」永欽は力一杯ごて始めました。わたしは非常に腹を立て、食卓から立ち去りました。わたしたちは大抵朝の食卓で、議論し合うのです。その他の時間には、あまり顔を合せることができません。夕方に

は、わたしはとかく急いで食事をすませると、就寝し休養して力を貯えるか、本を読みます。それとも流暢になるように、タイ語を自分で勉強します。わたしは今一冊のタイ語の本に、病みつきになっています。『王中の王』という物語ですが、戦争の話で、相当な戦術駆引きが書かれています。『三国(志)演義』には敵わないと思います。

つい二三日前になって美鶯が車のことをむし返ししました。わたしがテーブルから立上がろうとしているときに、彼女が言い出しました。

「わたしも少しは、わたしのお金を使う権利があると思うんだけど。お父さんがわたしにくれた遺産のことよ。わたし自分のお金で買うわ。」

「今になって、わたしのお金、あんたのお金、というものがあのかい？ 美鶯。」

「あんたがわたしの欲しいという物を、買ってくれないからよ。わたしは車が欲しいの。あんたはわたしを相当強制しすぎるわ。わたしだって欲しいものがあってもよい、という権利があることを、忘れないでちょうだい。わたしもお金には権利があるのよ。」

「ああ、好きなように、好きなように。車に乗ったら天国に上ったような気になるんなら、自分で手配しなさい。きみに権利があることは知ってるさ。お金の大部分はきみが持ち主さ。」

美鶯は亭主を尻に敷くような性格の女ではないんです。恐らく裏でこう言わせるように、教えた者がいるんです。それが誰かは、あの物事の後さきも考えない近代娘、彼女の妹に決っています。美鶯の言った言葉は、わたしの身体中に、痛く突きさりました。頭脳はひびが入り、破裂しそうです。その通りです。金の所有者は彼女なんです。わたしは何の権利もない夫にすぎないのです。以前には彼女の家の雇人でした。こういう考えが、彼女の頭の中に埋もれていることは、間違いありません。自分の夫に対する蔑視の気持ち、消え去る日は当然ないでしょう。わたしはこの女と結婚すべきではなかったのです。自らに誇りを持つ男は、絶対に自分より金持ちの女と、結婚すべきではありません。後で後悔せねばなりません。特にその女が、自分の雇用主の立場にあった場合はそうです。

わたしは美鶯の望み通り、車を買うことを承知しました。新車に乗って町をぐるっと廻ることができて、彼女は実に幸福そうでした。永欽と瑞錦は楽しそうに笑い、茉莉と明珠はクッションの上で眠っていました。わたしは一緒に行くことを、承知しませんでした。わたしたちは、まだ運転手が見つからなかったので、美鶯は商品配達車の運転手の一人に、朝夕運転に來させました。わたしは、首がちぎれて死ぬというほどの、已むを得ない場合以外は、この車には乗るまいと決心しています。

この車は灰色がかった、実にきれいな空色の車で、西洋のイタリアという国から、作られて来たものです。わたしは良く知っている人に、問い合わせてみたんですが、タイ国製又は近隣国産の車は全然ないそうです。遠い国から輸送して来なければならず、輸入税も払わねばならないので、値段は高かったです。わたしは金を払うときに、惜しいと思わざるを得ませんでした。国内で生産したら、半額ぐらいになるでしょうに。しかし誰も作ろうとする人はいないようですが、この方面の技術知識が不足しているか、まだ準備ができていないか、あるいは資本がないせいかも知れません。資本を持っている人も、産業のために工場を建設しようと考えはしません。それというのも、儲かる確信がまだないか、或いは儲けが少なく、酒造工場や酒場を作って、西洋式に抱いて踊らせる女を備えておく方が、確実に儲かると考えているからなんです。しかしそれでは若い男女は、人間が駄目になり、大人たちは自己の責任を、ないがしろにすることになります。そのことに考え及ぶ人が誰もいないか、あるいは他人の子、他人の孫、他人の妻などは、大事ではなく、金さえ儲ければよい、と思っているのでしょうか。もしこういう考えが、いよいよ深く根を下ろせば、国民はめいめいが、自分のことしか思わず、全体のことを考えなくなるから、国家は駄目になります。そして残念なことに、こういうサービス業の店の資本家

は、中国人か中国系の人たちなんです。ですからタイの人は、中国人は商売の頭で、どんなことでもする、金さえ儲かりやいんだと、とかく中国人を非難します。わたし自身も、このことは認めます。しかしタイの人自身も、若干の機会に於ては、やはりそうなんです。中国人はまだ役に立つものを、商いしようと考えますが、タイ人の金持は、金をじっと持っている、持出して金をばらまき、妾を手に入れたり、そのようなサービスをする所や酒場などで、女遊びをして快楽を求めたり、中にはそういう所へ投資する人もあります。それは早く金を増やそうとするためですが、やがてこういう店が、国中に満ち満ちることでしょうし、そのとき若い人たちは、すっかり駄目になってしまうでしょう。

わたしは世の中というものを、悪い方に取りすぎているかも知れませんが、人民の大部分は、こういう贅沢に使う金は、持っていないのです。遊びに行く人がなければ、この種のサービス業は、自然消滅するかも知れません。あるいは、もし悪い方に考えれば、金がないと、これを不正な道に求めます。金が欲しいときに、金がないというとき、耽溺惑溺が、罪業を恐れる心よりも、力が強いと、彼らは悪の道に金を求め、妙に恐ろしい社会となり、金持階級は毎晩寝ていても、肝を冷やして、目をさまさねばならなくなるでしょう。

わたしは美鶯に一回降参した以上、今後も彼女が何か派手な、高価な物が欲しくなったときには、彼女の言いなりにならねばならないでしょう。お母さん、弟はもう結婚しましたか？ もしまだでしたら、金持ちの女を愛しようなどとは、絶対に考えるな、後で兄貴のように後悔するから、と警告してやって下さい。家庭内の権力が、わたし一人の手に集中してないと、家庭の頭である家長にふさわしく、家庭を統轄することはできません。自分の代りに女を稼ぎ手、家庭の頭とする、新時代の男は別として、誇りを持つ男にとっては、あまり辛抱のできることはありません。女を家庭の頭に押しただくような例は、今では少なくなく、わたしはしばしば目にしています。容貌の良い男は、金持の女房を探すことによって、金持ちになろうと思うのです。しかしわたしのような男は、そうすることはできません。わたしは女房の得た遺産に頼ってはいませんが、わたしは自分の働きによって、その金を増やしています。身体中がへとへとなるまで、働いているのです。美鶯が金のことを口に出したとき、わたしは残念でした。わたしはわたしのお父さんとお母さんのように、琴瑟相和した夫婦の姿しか、見たことはありません。わたしはまだ火鉢の前で、親子が語り合っていた姿を、覚えています。わたしたちは非常に幸福でした。しかしここでは、わたしの家庭には、あのような幸福を持ったことはありません。何

かこう霧のような物が、隔て遮っているのです。以前にはその霧は淡かったのですが、今では段々濃くなる一方です。わたしは何としてでも近い内に、この霧を追ひ払う努力します。非常に愛する母上の足下に、跪拝させていただきます。

孩児
陳・琥珀
璇有

(第五十二信)

曼谷耀華力路

きのえうま

甲午二月一日(1954・3・5)

わたしの非常に愛する母上に、跪拝致します。

ある人がわたしに、こう言いました。人間として生まれて来た以上は、自分で楽しまなきゃ、と。しかしわたしは賛成しませんでした。それはお母さんがこう教えて下さったことがあるからです。「仕事の方が大事だよ。働きの成果によって、どの人が人間らしいか、ということが分かるんだよ。能力のある人間というものは、食べることと寝ることしか知らない人ではないんだよ。」

わたしはできるだけ息子^{シム}の永欽^{エウキン}に、仕事の価値を教え、仕事愛するように、教えて来ましたが、彼の母親は逆に、彼におしやれをさせ、彼の叔母は、彼を頑固にさせました。それは無益なことに決っています。わたしは一人息子はわたし一人の管理下に置かねばならぬと決心しました。

「永欽はわたしの子でもあるわよ。あんた聞いたでしょう。あの子は上の学校まで進みたいのよ。あの子は先生になりたいのよ。あの子はあの子の好きな、あの子の先生み

たいに立派な先生になりたいのよ。」

「しかしな、あの子は商売人にならんといかん。わしらがやり始めた仕事を、ぶつんとやめてしまいうわけには行かん。先生なんぞにならにゃならん、という義務はない。あの子は商売人にならにゃいかん。」

「でもあの子は商売は嫌いじゃないの？ あの子がいくら商売に熟練しても、嫌いだというものを、何も無理強いすることはないわ。強制することは、仕事で良い結果を生むとは考えられないわ。」

「あれはまだ子供で、考えもない。あっちの人こっちの人の、真似をしたがってるだけなんだよ。」わたしはわたしの考えを、美鶯に説明して聞かせてやりましたが、しかし彼女はわたしの考えを、馬鹿にしたように、鼻をくすんと鳴らしました。「大きくなれば、何でも自然に分かってくるようになるよ。今の所はぼくがあれの気持ちに逆らうことを、嫌ってはいるけど、大人になったときには、おやじが自分の人生設計に、結構な図面を引いておいてくれた、と感謝するようになるよ。」

「あんたの好きなように！ どうしても無理強いするといふのなら、それまでだわ。どうせあの子は頑固になつて、性格がだめになつてしまふでしょうよ。」

「きみはこの事に、口ばしを入れんようにしてもらえんかな？ 永欽はぼくの一人しかない息子なんだ。きみには

娘たちの事を任すよ。どうにでも好きなようにしてくれたい。しかしこの息子のことについては、邪魔せんぐれ。」わたしは最後通牒を發しました。美鶯はわたしの顔をじつと見つめていました。

「娘たちはどうにでも、わたしの好きなように育ててよい、とあんた言ったわね、確かにそう言ったのね？」彼女は返答を迫りました。

「一番下の女の子だけだ。上の二人については、相談してくれ。ぼくは父親だ。責任を持たにやならん。」

「明珠インシュのことには、責任をとらないの？ あんたはあの子が、自分の子供じゃないと思ってるの？」

「そりゃ、ぼくの子供だ。否定はしない。しかしあの子は、きみに上げるよ。どうなりと、好きなように育ててくれ。ぼくは全然干渉しない。」

「きつとよ、きつとそうしてくれるなら、それでいいわ。」美鶯は信じ難い、というような恰好をしました。「それであんた、永欽のことはどうするの？」

「先ず最初に、夕方中国語の補習をさせる。ぼくの知っている先生の家へ、勉強に行かせる。小学四年の試験に合格したら、学校をやめさせて、店の仕事を手伝わせる。勉強は夕方だけ、簿記と北京語を習わせる。」

「まあ、店の手伝いをさせるなんて、まだ小っちゃすぎるじゃないの。学校へ行かせるべきよ。知り合いがた

くさんできると、顔が広くなるわ。あの子はまだ、子供らしく遊びたいのに、あんたはこんな年頃から、もうきつい仕事をさせようとしてるんだわ。」

「きみはぼくがひどい人間のようなことを言うんだね。絶対にあの子の能力以上のことをさせたりしないよ。」

わたしたちは子供の養育について、このように担当を分けることに、合意しました。わたしは明珠インシュのことについては、恐らくきつと口を出すことはない、と思っています。顔を見るのさえいやなんですから。彼女の将来がどうなろうと、母親がちゃんとするでしょう。いずれにせよ、無茶苦茶に悪くなる、ということはないでしょう。美鶯は母親なんですから、子供をしあわせにしたい、と思うのは当然です。母親の中には、子供に楽をさせたいばかりに、働くことを教えたことがなかったり、また中には至れりつくせりの世話をしやうたあげく、大きくなっても、自分で食べて行けず、いつまでたっても、他人の世話にならねばならない、というのがいます。そしてこういう方法は、タイ人の母親がよくやる手で、子供が大きくなって、娘ざかりになっているのに、まだご飯一つ炊けず、服を洗ったこともなければ、アイロンをかけたこともなく、食事ときには、母親が口まで食べものを運んでやらねばならない、といった類いで、子供はまだ小っちゃい、勉強することだけが任務で、他のことは何もしなくてもよい、家事は主婦だ

けの仕事で、子供や家長には無関係だ、としか考えないのです。こういうことをやっている、自分自身が死ぬほど疲れるだけではなく、子供の性格まで、駄目にしてしまいます。瑞錦はまだ小っちゃいですが、もうご飯が炊けるようになり、テーブルを拭くとか、使った衣服を集めて、持って行って、使用人に洗濯させるとか、母親が忙しいときには、妹の面倒を見るといような、簡単な家庭内の仕事をしています。永欽は店頭販売の手伝いが、ちゃんとできます。わたしたちは必要以上に、子供たちに暇を与えたことがありません。わたしたちが子供に対して厳格すぎる、という親があるかも知れません。しかし大抵の中国人は、わたしのやり方に同意します。金だってこういう育て方をしています。金はふだん、それほど勤勉な男ではないんですが、彼にしても、子供が怠けているのは、見たくないのです。

「わしらがえらい目をしとるのに、あいつをのうのと坐らせておくことはないじゃないか！ 親が子供をこしらえるのは、子供にちつとは仕事を助けてもらうためじゃ。わしらがこしらえたんじゃ。何でも役を立てようとせんのじゃ。牛や水牛を飼うのは、きつい仕事に使うため、鶏や家鴨を飼うのは肉を食うためじゃ。子供を養うのは、後をつがせ、年とってから頼るためじゃ。年とってから頼りになりたけりや、働く稽古をさせにやならん。わし

は年とって背中が曲がるまで、身体を引きずって働きたいとは、まだ思うとらん。子供を養うてやったら、年をとったら、今度はわしらを養うてくれるべきじゃ。」

金の言う理由は、可なり利己的なものではありませんが、事実です。人間は誰でも、多少の差こそあれ、利己的なものです。病氣になったとき、死後のことを子供に托したくない人が、どこにありましようか。老後を子供に頼りたくない人が、どこにありましようか。ただ一本立ちになるまで育ててやり、一人でやって行けるようになりさえすれば、それで気がすむという人は、自らの気持ち、そう言っているんです。有り余るほど金を持っている人でさえ子供に、少なくとも精神的には子供に、頼りたいのです。子供が一寸した孝養をつくすこと、例えば料理を持って行って食べさせるとか、みやげに菓子を持って行くとか、仕事の相談に乗って貰うとか、するだけでも、両親にとっては、非常な楽しみなんです。

もしいつか永欽や瑞錦が、家庭内のことをわたしに説明しに来れば、わたしは本当に嬉しいです。少しもうるさくはありません。それはわたしが、子供のときに不審なことは、何でも両親にたずねたのと同じように、彼らがわたしを信用し、わたしの知識を信じていることを示すからです。非常な身近さ、親しさを示すことにもなります。このごろの子供は、あまり親に近づくことができません。子供

たちは学校に行き、親は働きに行きます。てんでんばらばらに出かけるので、あまり理解し合えません。子供が何かを不審に思つて、親にたずねても、返事を貰えなかつたり、時には叱られることすらあります。そんなことでは、親にきくのはもうやめよう、その方がましだということになります。

わたしはお母さんの孫たちのことで、一つ気がかりなことがあります。自動車が原因で、わたしは妻と仲違いし、この子はよくが育てる、あの子はきみが育てると、子供を分けたことが、今後わたしたち夫婦の間で、他の事にまで仲違いするようになるかどうか、ということです。小事が大事に発展することを心配しているのです。しかしわたしは、もうこの事は考えるのを止めた方がよい、と決心しました。ただほんのちよつとしたことですが、心から離れないことがあります。それは明珠ミョウジュという子は、大きくなればなるほど、なぜお母さんに似てくるのか、ということなのです。そしてこの子は目もとが、美鶯に非常に似ているので、二人の姉より、美人になりそうです。一方の心では、この子が美鶯に、もう子供ができないようにした原因である、ということ嫌っていながらも、この子の顔を見るなり、心が軟化せざるを得ないのです。お母さんの孫たちは、みな顔にお母さんの面影を残しています。それでわたしは、益々お母さんが恋しくなるのです。もっと書きたい

のですが、夜もおそくなって参りました。明日働く力を貯えるために、寝なければなりません。

孩児

陳璇有

(第五十三信)

曼谷耀華力路

甲午六月十日 (1954・7・9)

非常に愛する母上に、跪拝致します。

永欽はわたしの希望通り、夜学へ通っています。彼の勉強は小人数で習っているのです、学校よりは、効果が上っています。先生一人に、学生はたったの七人です。学校では生徒三十四人のクラスでしたから、先生は教えてもみなに行き届かず、教育効果を仔細に点検することができませんでしたが、この先生は非常に良い人で、しょっちゅう何かを教えると、その結果を書いて来て、わたしに見せてくれました。そしてわたしに何をわたしが勉強させたいか、意見を聞かせてくれ、と言うのです。永欽に特に読ませたい本がありましたので、そう言ったことがあるんですが、その先生はその通り、やってくれました。この先生はタイへ来てまだ間がなく、非常に高い知識を持っています。友だちの一人に聞いたんですが、孫逸仙^{孫逸仙}の革命軍に、兵士として加わったことがあり、前職は上海^{上海}の上級学校の先生であつたとかで、タイへ来てもまだ教師という職業が好き

で、自分の古い言葉を、子供に教えさせたいという中国人の親の子供に、中国語を教えているのです。大人で知識の少ない人も補習できます。子供でも大人でも、教えてくれるんです。この先生の年ごろは五十才くらいで、わたしの筆蹟が非常に見事だと、ほめてくれたことがあります。そのほめ言葉は、お母さんに差し上げねばなりません。お母さんのお手柄です。

わたしのタイ語の独学の方も、うまく行っています。今では新聞を読んでも、分かりますが、発音の方はまだ十分に正確ではありません。家族といるときには、ふだんは潮州語で話します。子供に彼らの先祖の言語を、忘れさせてくはありません。

子供の問題はまだまだ、沢山あるんです。永欽が雇人の一人と、問題を起こしました。この雇人というのはまだ十ほどの子供で、工場で雇われて、軽作業に従事していたのです。菓子の箱の蓋に、店のレッテルを貼って行く役目です。両親はわたしたちの近所に住んでいて、父は三輪車^{三輪車}のペダルを踏んでいますが、母は子供を育てねばならないので、家にいました。非常に貧乏で、何とか自分でやって行けそうになった子は、みな外へ働きに出なければならぬのです。長男は港で荷物運びの苦力をしています。この家族は子供がなんと十六人もあって、同じぐらいの身体をした子供がずらっと並んでいる所を見ると、見ただけで参っ

てしまいます。わたしはもっと孫を作って、お母さんにほめていただきたいと思つていたんですが、十六人もとなると、やはり卒倒しそうです。神様は必要以上にお授けになったのです。わたしが言おうとしている女の子は、さあ五番目か六番目かはつきりとは知りませんが、手に負えぬくらい、口の悪い子で、ある日その子が一箱の菓子を全部こぼしてしまつたんです。そこへ腕白小僧の永欽が威張つて怒鳴りつけたんです。

「ほんまに、がさつな奴じゃ。菓子がみな泥だらけじゃないか。この菓子が幾らするか、お前知つとるんかい？」

「わたしに文句をつけなさんな。何でわざわざ邪魔になるように置いたのさ。」

「口答えをしない。クビにしてやるからな。」永欽が言い返しました。わたしはすぐ近くの部屋にいて、はつきり見聞きました。「お前は雇人のくせに、間違ひをしでかして、口答えができるんか。わしは主人だぞ。」

「馬鹿主人！ 支那人の息子野郎！ 住む国もないのに、ここへ来て偉そうに威張りくさつて。ちよっ！ あたいのお母が言つてたわよ、この国はタイ人の国だよ。お前らは住まわせてもらい、商売させてもらつてゐるくせに、何じやい、主人づらしやがつて！」この子は多分自分の方が大きいと思つて、腰に両手を当てて突つ立つたまま、顔を振り振り、べらべらとまくし立てました。

「それでもお前は、わしの雇人じゃ。お前はここで月給を貰うとる。めしが食えんで死にそうなくせに、口ばかり偉そうなこと言やがつて。わしはお前の主人だぞ。ほんまに偉いんだつたら、馬鹿支那人の所へ雇われに来るなよ。」永欽の声も相当がながん響きました。

「帰れ、支那へ帰つて、牛のくそを食いやがれ！ 森の中へ入りやがれ！」女の子の声がひびき渡りました。わたしはすぐ算盤を置きました。手も心もぶるぶる震えました。その子に腹を立てたのではなく、耐えがたい精神的な衝撃を受けたのです。ほとんど何も手につかず、ただ椅子の背にもたれて事務室の天井を眺めていました。二人の子供の口喧嘩の音が、まだ続いていましたが、それを禁じ罵る大人の声が続いて来ました。

「そんなこと言うのは中国人を侮辱しとる。」一人の中国人の娘の聲が上がりました。この子は水担ぎ屋の子です。

「永欽、お父さんに言いつけて、あいつを追つ払いなよ。」

「お前らもタイ人を侮辱しとる。」もう一方の側の子供に、味方をするような調子で、大人の聲がしました。ほんのちよつとしたことが、大事件に燃え拡がろうとしていました。わたしは長嘆息して感情を抑え、立上つて部屋から事件の現場へ行きました。

「もういい加減にせい。喧嘩なんかする奴があるか！」とわたしはきつい声で言い、こわい顔をして、年の行った

連中を見渡しました。「良い年をして、子供を止めることも知らんのか！ 今後こんなことが起つたら全員処罰する。ほんのちょっとしたことが原因で、何でも、度を越して罵り合つたりせにやならんのだ！」

「あの人、わたしに怠けもんの人種と言うたわ、そんなこと、言うてもいいの？ がさつい奴とか。」事件の発端の娘が、口をとんがらかして言いました。

「あいつもぼくに、住む国もないのになんて言やがるんだよ。」

「それが嘘だと言うのかい？」彼女が横取りして言いました。永欽はぼかんと、口を開けたままでした。

「喧嘩は今すぐ止めろ。みんな元にもどって仕事をせよ。永欽！ もうここへは入って来るな。父さんは誰とでも、問題を起こさせることは好かん。」

永欽はわたしの顔を見つめ、目に涙を浮かべていました。わたしは知らん顔をして、わたしについて来い、とうなづきました。永欽は事務室に入って来て、わたしの前に不快な顔をして坐りました。

「お前はお父さんが、あの子の味方をしたとは、恐らく考えておらんじやろうな。お父さんは問題を起こしとうないんじや。」

「でもあいつの方が、先に文句を言いおったんだもん。」彼はかぼそい声で答えました。

「たとえそうとしてもじゃ。お前の方からつくくな。臭い物は手でつくくんじやないよ。」

「お父さんはあいつをクビにしないの？ あいつを追いつ出してよ。なんで雇つとくの？」

「クビにはせん。うちで雇つとく。月給をもらうときにどう思うか、知りたいもんじや。この月末には、お前が連中に月給袋を配つてやれ。実際あいつは、ちゃんとしたことを、知つたり考えたりするには、まだ子供すぎる。別に何も考えがあつて、言うたわけじゃなからう。かつとなつて、あんなことを言うただけじや。」

「あいつはぼくより大きいよ。それにデーン婆おなあも、あいつの肩を持つて、ぼくに口答えをしたよ。デーン婆あの年は、お母さんと同じぐらいだよ。」

「まあ、いいよ。この月末は菓子包装おなの女子連中全部に、月給を渡すのはお前の役目じや。デーン婆あは年が行つてから、恥ずかしいと思うかな？ しかしお前はもう、人種民族の事については、何も言うてはならぬ。雇人とか主人ということもじゃ。何にも言わずに、黙つて月給を持つて行つてやれ。分かつたか？ 人を雇うたら、良い主人でなけりやいかん。」

「良い主人は、雇人に罵られても、黙つていないといけないの？」彼はさも腹立たしげに、質問しました。

「そうじやない。良い主人は雇人と、喧嘩などしてはな

らんのじゃ。態度を立派にせんといかん。わしらがあの連中より偉いということは、言わんでもみな知つとるんじや。わざわざ念を押して、言うてやらんでもよい。」

「この国に住まわせてもらつとると、向うの方で念を押して来たら？」

「わしらは税金を払うとる。お前、そのことはもう考えるな。それはやきもちやきの連中の言う、ありふれた話じや。」

永欽にはわたしの説明が分かりませんでした。月給を支給する人になれたことに満足しました。あの女の子の生命をつなぐ、金の所有者となれることに。

わたしはこの不祥な事は、できるだけ考えないようにしていました。耳にはしょっちゅう、あの娘の声が、まだちらほら入って来ました。わたしは彼女をクビにしません。自分で辞めて行かねばならないように、仕向けることもしませんでした。心中ではまだ彼女のあどけなさを、可哀想に思っていたのです。彼女がもう少し大きくなつたら、この事をどう思うか、知りたいものです。今彼女は幸福に暮している永欽や、彼の妹たちが、うらやましいのです。腹一杯食べて、きれいな服を着ている。しかし自分には何もない。恐らく大人たちが、この国はタイ人の国であるのに、なぜ中国人たちは自分らより金持ちなんだろうかと、そういうことを話して、彼女の耳に入れたんでしょう。

もしタイ人のすべての子供たちが、われわれに對して、あの娘のように強烈な考えを持てば、彼等はずっと勤勉になることでしょう。しかし大抵の子供は、何も考えていないようです。相も変らず旧態依然、という所です。平和を愛するあまり、のろい人間になつてしまつてゐるのに見えます。あるいは現在自分の持つてゐるものに、満足しすぎてゐるせいかも知れません。仏教のお坊様は、自分が持つてゐる物に満足せよ、と教えてはいますが、未だ持たざる物を、急いで探し求めるな、とは些かも禁じてはいません。すべての人間は、幸福を得るに必要な程度の財を、探し求め貯えておく権利を持つてゐます。あるいは彼等の現状が、すでに幸福なものであるからかも知れません。貧しく苦しいときには、暫くは不平不満をもらしはしますが、何も改善しようとはせず、ぼやきにぼやいた挙句、また元のように笑い興じるのです。あの人たちを見ていると、まるで色鮮かな美しい蝶々が、食を求め終ると、ひらひらくるくると舞つて、華麗さを誇示し、空腹を覚えると、また新らしく食を求め、蜂のように食を貯蔵しないのと、似てゐます。しかし蜂は多量に食を貯えます。それを人間が、ごっそり泥棒するといふわけですね。人間でなければ熊のような動物が失敬します。蝶々の方では、そんなことをするのは、くたびれ儲けだ、腹が減つたらその時になつて、食べ物を探した方がよい、とでも考えてゐるのではありません。